

1984（昭和59）年夏、ロサンゼルスオリンピック（ロス五輪）。柔道の山下泰裕選手らの活躍に日本中が興奮しました。このロス五輪体操の銀メダリストが、今回ご紹介する教育学研究科教授の梶谷信之先生です。

梶谷 信之（かじたに のぶゆき）
1955（昭和30）年 宮崎県出身
1978（昭和53）年 日本体育大学体育学部卒業
紀陽銀行、奈良県立医科大学を経て1988（昭和63）年から本学勤務

宮 崎県生まれ。兄が体操競技をしており、その影響で自然に始めていました。技に成功するとうれしくて、難しい技にどんどん挑戦するうちに、のめり込み、中学生のころには九州大会で準優勝するまでになりました。その後、体操の名門・大阪清風高校を経て日本体育大学に進学。4年生のときには体操部のキャプテンとして300名を超える部員を率いました。卒業後も銀行に勤めながら、世界選手権に出場するなど活躍し、80年にはモスクワオリンピックの日本代表選手に選ばれました。ところが、ソ連のアフガン侵攻に抗議し、日本を含む西側諸国の多くが出場をボイコット。無念の涙を吞みま

した。非常にがっかりされたそうです

が、すぐに立ち直り、翌年の世界選手権などで着実に実績を重ね、84年のロス五輪代表の切符をつかみました。

日 本代表体操選手団のキャプテンは最年長の梶谷先生。心がけていたのは「みんなの意見を二つにする」と。選手団には森末慎二選手、具志堅幸司選手（ともにロス五輪金メダリスト）ら一流のアスリートがおり「オリンピック選手になるくらいだから、みんな『自分の意見が一番』。そんな彼らを団体戦優勝という目標に向けてまとめあげ、チームワークを発揮させるのにたいへん苦心しました」。そして、みごとに銅メダルを獲得。

個人戦では平行棒に出場。順調に勝ち進み、決勝に進出しました。日本はおろか世界中が注目する大舞台。「フィニッシュで平行棒から手を離して、床に着地するまでの約0.2秒間

が1分間にも感じられた」そうです。結果は10点満点で銀メダル。同じく10点を獲

得したアメリカのバート・コナー選手より予選での得点がわずかに下回ったため、惜しくも金メダルは逃してしまいました。「10点満点をいだけたので、自分では納得しました。正直、金メダルは欲しかったですけどね」

口 ス五輪出場前に、体操の指導者を志し、銀行を退職。奈良県立医科大学などを経て、88年、本学に採用されました。現在は教育学研究科教授として幼児体育などについて講義するほか、夏休みには小学生向けの体操教室も開いています。子どもの頃に体の動かし方を覚えて、スポーツするときの基礎にして欲しい。体を動かすのは怖くないことを知って、運動を楽しんで欲しい、という願いを込めています。

2008年から「競技力を高める」と題した公開講座を開始。岡大生だけでなく、地

域の方々にも効果的に成果をあげるトレーニング方法を講義しています。「オリンピックの話が聞け、実際のメダルも見られる」と好評のこの講座、来年度も開講予定です。みなさんもメダリストの講義を聞きに来られてはいかがでしょう。

